

意識改革 確かな手応え

河北新報社は3月15日、これまで実施した巡回ワークショップ「むすび塾」の参加者による座談会を仙台市青葉区の市民会館で開いた。宮城県内外の町内会役員や教師ら5人と、むすび塾進行役の減災・復興支援機構(東京)の木村拓郎理事長が、塾開催後の住民意識の変化や、東日本大震災の教訓を地域の備えに生かす活動を話し合った。

避難方法を議論

むすび塾は2012年5月にスタートし、この2月まで41回を数えた。開催後の意識の変化や取り組み、成果について教えてほしい。中山 参加を機に地域住民の防災意識が高まった。

出席者

- 東松島市員田行政区域長 中山 勝文さん
- 宮城県山元町花金行政区域長 菊地 慎一郎さん
- 仙台市青葉区荒巻地区町内会連合会長 土田 建さん
- 千葉県白子町南白亀小前校長 高山 佳久さん
- 朝日海洋開発(大崎市)専務 安倍 志摩子さん
- 安倍 志摩子さん
- 減災・復興支援機構理事長 木村 拓郎さん
- 河北新報社編集局長兼報道部長 今野 俊宏

ワークショップ「むすび塾」参加者座談会



ワークショップ開催後の意識の変化や取り組みを発表した座談会

1次避難所を従来より約1.5倍高台に移したほか、震災後、三陸自動車道ののり面に整備された避難階段で、お年寄りだけで避難訓練を行った。若い親に市紙を配ったところ、8割近くが参加するようになった。

心のケア訴える

今後、防災・減災対策として取り組みたいことや実現に向けた課題は、菊地 私人の地域は「近所の底力」の向上を目指している。課題は高齢化だ。要支援者のいる世帯を把握して声を掛け合い、非常時でも全員で避難できるようにしたい。

変化を検証して

中山 避難所となる学校の教職員に、自主防災連絡協議会の会合に参加してもらっている。教室の割り振りや食料の備蓄について話し合い、連携を深めている。

住民同士の連携 課題も

高山 震災で被災した話の命を守るという意識が高まってきた。学校が子どもを守る避難訓練のほか、休日に行きやすい避難所を確保している。子どもたちと近所の高齢者が顔見知りになれば、保護者としてもらえると思う。災害に備える学校と保護者の連携を話し合った。

座談会出席の皆さん



なかやま・かつふみ 東松島市大曲の貝田行政区域で12年5月に開催した第1回むすび塾に参加。住民10人と複数の避難所の確保や近所づきあいの大切さを確認した。13年4月にインドネシア・アチエで開いたむすび塾で語り部も務めた。



きくち・しんいちろう 12年12月に宮城県山元町花巻行政区で開催したむすび塾に参加。地域は海から2キロ離れたが、多くの世帯が津波被害を受けた。住民9人とともに、内陸部への迅速な避難を話し合った。



つちだ・たけし 12年12月に仙台市青葉区の荒巻地区で開催したむすび塾に参加。町内会のほか、地域にある荒巻小の教員、保護者ら11人とともに要支援者支援を議論した。孫と避難ルートを確認する個別避難訓練にも取り組んだ。



たかやま・よしひさ 13年7月に千葉県白子町の南白亀地区で開催したむすび塾に協力した。地域は海に面した平野で高台がない。南白亀小の教員と保護者ら9人と、震災の語り部2人が津波に備えた学校と保護者の連携を話し合った。



あべ・しまこ 13年4月のインドネシア・アチエで、13年6月の静岡県下田市の吉佐美地区で開催したむすび塾に震災の語り部として参加。津波の怖さと備える大切さを説いた。水難学会の指導員として着衣泳の普及啓発にも取り組む。



木村 拓郎さん 減災・復興支援機構理事長

異世代・地域をつなごう

むすび塾の参加者は「震ためて話す機会が少ないの災の振り返りができてよかった」。「地域の人の考えを知ることができた」と。民が震災当時の経験を時系に継承させるのが今後の課題になる。



むすび塾 過去の紙面から

東松島市大曲の貝田行政区の第1回むすび塾を詳報した2012年5月11日朝刊

東日本大震災の教訓を生かすため、河北新報社は地域住民らと一緒に、地震・津波に備える巡回ワークショップ「むすび塾」を開いています。名称には、地域と人、人とのつながりを強め、防災・減災に結び付けていきたいとの思いを込めました。次回の「むすび塾」は25日、宮城県涌谷町10区自主防災委員会で開催します。